

末黒野

すくろの

8月号 (通卷864号)



雨蛙

海に湧き沖目指す雲夏来る
潮の香のベンチ夏蝶膝元に
薔薇園や薔薇の香りに身を沈め
岩を打つ浪に怯まず夏の蝶
剥落の仁王へ百の夕牡丹
ぼうたんの蔭の牡丹へ腰屈め
葉より出で葉に紛れけり雨蛙
公園の砂場にシャベル走り梅雨

松本三千夫

(名誉主宰)

銀の匙

新緑の山を深めて風わたる
葎切やふた筋の川合ふところ
銀の匙触れ合うて鳴る緑の夜
薫風やためらひつ跳ぶ水溜り
寄り添へる水泡のひとつ夏の鴨
円墳の眠りの深し樟落葉
まひまひや沼に根を張る大櫨
農小屋の小さき窓や夏の蝶
河岸五月をとこの活気目のあたり
カフエテラス薔薇の香のせて風過ぎぬ
山法師にぎやかに来る子等の声
目まとひの径を抜けきて波郷句碑

黒滝志麻子

針槐

森清堯

沢音をたどる林道濃山吹
行く春や湖を眼下の峠茶屋
落日のほてりの残り躑躅山
うすくなる交はりの増え更衣
集へるも大人ばかりや子供の日
もてなしの風呼ぶ席の新茶かな
端然と日を返しをり山法師
針槐眼下の里をふくらませ
柿若葉鬱散らしたる川堤
肩書きはとうにはづせり若葉風
身に余る新しき役ほととぎす
浦里へ下る急坂花海桐

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

こどもの日

安齋久英

香をこめて卯の花こぼれつぐ日暮
緑蔭をはみ出す色やランドセル
青鷺の素早き嘴の漁れり
湯の街の山並暮るるほととぎす
こどもの日鳶は高みへ高みへと
海堡に片脚かけぬ虹の橋
只ならぬ夢でありしよ明易き
べた凧の浦賀水道夏に入る
青鷺の冠羽靡かせ望む沖
緑雨去り光とどむる屋根瓦

小面

石黒興平

コサージュの如き花つけ幹太し
飛花落花江の島沈むほどの人
鎌倉の端山の白き桜かな
切れ切れに牛の鳴き声春疾風
小面のもの言ひたげや春の宵
軒端来てどれが子雀親雀
ふかふかの丸座布団の春炉かな
漁火の横一線や夏に入る
搾乳のにれかむ牛や夏の暁
鶏鳴につられ鳴く牛夏の暁



初
蛙

岡野里子

灯の点る百のぼんぼり春の雪
石畳突上げ老樹ひこばゆる
里山の風やはらかし二輪草
花木五倍子里の木橋の音乾き
鶯の声拾ひつつ朝浄め
竜天に登る湾口波荒げ
一握の野蒜を引きぬ啄木忌
風の音山の音せり康成忌
関の声あぐるがごとし花水木
湿原のひかりの流れ初蛙

望
郷

田中臥石

春塵の玻璃戸拭きをり誕生日
早乙女に変身妻や苗運び
五月連休田植やうやく終りけり
山藤の花の飛瀑や遠岬
信仰の鋸山や沖霞む
望郷の胸に火点す夕蛙
国土削ぐ海や浜昼顔も瘦せ
牛売つて呆と草刈る老農夫
香水の移り香灰と別れけり
夢二碑へ宵待草の花の影

白牡丹

森清信子

切り岸の松の一樹や鳥雲に
落ちさうに迫り出す岩や懸り藤
里山の日差に狂ひ紋黄蝶
茅葺を燃やすはならじ緋のつつじ
神苑の無垢を尽くせり白牡丹
朝市や桶の水の香菖蒲の香
白靴の朝日を返す湖畔かな
かはらけの的を外さず谷若葉
蜜吸へる眼するどし揚羽蝶
白鷺の夕日とどむる翼かな



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



薄 暑 及川照子

木漏れ日の箱根古道の薄暑かな
植木市鎮守の杜の笛太鼓
鯉のぼり過疎の里にも嬰の声
母の日や今更妣に做ふこと
薔薇開き熱き息吹の真紅かな
早逝の友への供華や朴の花
今年竹藪の暗さに育ちをり

春惜しむ 今村千年

写 経 岡田史女

鎌倉の八重の山道百千鳥
大寺に矢を射る音や春深み
ねんごろに古都を描きて春惜しむ
露座仏の晶子の歌碑や夏に入る
元町のパン焼く匂ひ街薄暑
幼子はすぐに腕白薄暑光
垣越しに弾む話や蚊遣香

初夏の空へ放てり竹とんぼ
鯉のぼり百を渡して在所川
雲雀野や紙ひかうきの旋回す
金銀花祠へ続く径の辺に
風騒ぎ代田の水をあふれしむ
一片の雲へきそへり今年竹
老鶯や写経にこもる小半日

青炎集

松本三千夫選

横浜 梅田 武

踊りたる鮑二つや伊豆泊り

一夜漬け島のらつきよに島の塩

柏餅ほどの靴はき初節句

変幻の青田のうねりひもすがら

鴨涼しゆつたりと引く水尾ひとつ

冷麦の終のゆらめき掬ひけり

横浜 外山生子

雪柳散つて岸辺の石飾る

チューリップ百万本の咲く平和

街川に影泳ぎをり鯉職

軒菖蒲飾り息災願ひけり

ほのかなる葉の香妣の香柏餅

菖蒲湯に傘寿の憂さを流しけり

大綱白里 岡井マスミ

花散つて雑木の庭となりにけり

受診待つ窓初夏のちぎれ雲

療養の窓に新樹の吹かれをり

訪へば一花残れる牡丹かな

刻少し余し立寄る夕牡丹

垣薔薇の膨らめば来る忌日かな

横須賀 大川暉美

鳴きとよむ蛙に闇の膨らみぬ

流れつつ色重ねつつ花筏

測量士に踏まれ蒲公英を残す

山際まで細波光る代田かな

薫風と潮の香まとふ倉庫街

絵タイルの舗道に射しぬ新樹光

横浜 池谷鹿次

花あやめつめたき雨の石畳

磯伝ふ声騒がしき小鰯刺

犬吠や一八〇度夏の海

鯉船目差す漁場の潮ぐもり

万緑やぐづる児あやす母若き

川音の和やかなるや風涼し

横 浜 山 口 登

焼きあぐるピザ待つ列や春の屋
手応へのそこそこにあり浅蜷搔く

二合半の酒分けあひぬ春の宵

初夏の港せばむる豪華船

鎌倉の青嶺を一步一步かな

ゆきあひの谷をうづめて山法師

横 浜 太 田 良 一

老人に白き脛あり汐干狩

縄張りに戻る老鶯谷深し

軋む音の水車を回す緑雨かな

新緑や峠の茶屋の木のベンチ

木と紙の家に住み慣れ鯉幟

結界を示す立札蛇の衣

横 浜 饗 庭 恵 子

夕さりの一枚羽織る浅き春

若布干す磯の香りを干すごとく

スカーフのほどけ零るる春の色

夕まぐれ緋の色沈む落椿

花疲れ一膳の箸洗ふのみ

蛙蛙声に疲れのなかりけり

横 浜 鍋 島 武 彦

戦前の生れを生きて昭和の日

明けやらぬ甲府盆地や朝霞

梓川の激つ流れや夏来たる

参道や百花に勝る樟若葉

雪回廊巡るバス旅五月来る

せせらぎも馳走の一つ床料理

大 網 白 里 亀 卦 川 菊 枝

母と子の手のひら問答紙風船

鯉跳ねて五月の光こぼしけり

ひとところ川幅うめて花菖蒲

記念樹の牡丹一輪咲きにけり

賑賑と子つばめの鳴く軒の梁

落の葉へ音たつる雨矢のごとし

横 浜 芝 田 幸 恵

あしたもう見られぬさくら吹雪かな

体調の日日の移ろひ四月尽

年ごとに飲食淡し豆の飯

艶ませる葉桜速き月日かな

青嵐兜太句集を懇ろに

どの花も佳き名貰ひぬ菖蒲園

耕 土 集

黒滝志麻子選



青き踏む夕日を背の長き影

横浜 滝口 洋子

燕二羽足元掠め雨上り

幼児の取らむと跳ねてしやぼん玉

夏近し風の誘ふ一万歩

目高の子自玉ばかりの光りをり

分葱ぬた盛りて形見の白磁鉢

横浜 大塚かずよ

車座の早崩れけり花の宴

宅配のピザを待ちをり花筵

五千歩へ程良き風の立夏かな

大樟の樹齡二千や若葉風

穏やかなる風を誘ひ花の昼

横浜 五十嵐富士子

法話説く袈裟の鮮やぎ花祭

オカリナの木霊かへしや百千鳥

香ばしき朝のパン屋や百千鳥

海に向く按針墓碑や花馬酔木

手にも触れ頬にも触れて花万朶

横浜 友田 悠子

果たせぬ夢まだありぬしやぼん玉

カフエの屋根覆ふばかりや花ミモザ

子等二人初めて挑むボートかな

終点の駅は磯の香夏初め

新緑や迫める影の五智如来

平塚 尾崎千代一

薫風や木椅子に休む警備員

触読の生徒の声や若葉風

深閑と鑑貞廟や緑さす

木道や歩荷迎ふる小屋の主

川崎 堀江 久子

初恋や枇杷はんなりと色づきて

下草を引けば十薬香を放ち

トンネルを出つれば山の滴れり
もこもこのパッチワークや麦の波
早苗田のさざ波山を泳がせて

椎の花

小川 玉泉

(名誉顧問)

きつと立ち風やり過ごす葱坊主
大雨去り老鶯の声はづみをり
軒の巢に燕来ぬまま四月行く
濃き紅を五月に見せて庭楓
風の後追ふかにこぼれ椎の花
水瓶の浮葉隠れに目高たち

雑記帳 13

我が家の北西の地境に樹齡百年になる山桜がある。隣家で新築をするため、やむなく根元から伐った。黒い六ミリほどの実がこぼれて、別れを告げているように見えた。